

書評・樽松かほる・大島宏・高瀬幸恵・柴沼真・影山礼子・辻直人著

『戦時下のキリスト教主義学校』

教文館、二〇一七年

大 迫 章 史

日本の教育史研究においてキリスト教主義学校そのものに焦点を当てた研究は多くはない。こうしたなかで老川慶喜・前田一男『ミッションスクールと戦争』が出版されるなど、近年徐々に研究成果の蓄積はなされつつあるが、主に戦時下における立教学院の動きを追ったものであった。この点からすれば、本書はその対象として広くプロテスタントのキリスト教主義学校について述べられている点で、これまでのキリスト教主義学校研究を前進させたものとして意義深い研究である。これはまた共同研究でしか取り組むことが困難なテーマでもある。

本書は、戦時下においてキリスト教主義学校がいかなる道を歩んだのかを、歴史的な手法を用いて、その実態を明らかにしようとした共同研究である。日本学術振興会科学研費補助金・基盤研究C「戦時下におけるキリスト教学校教育の動態―統制に対する対応の多様性を中心として」をベースにしている。まず本書の構成を述べておく。本書の構成は、第一章「キリスト教主義学校に対する文部省の統制」（大島宏）、第二章「立教高等女学校の妥協と抵抗」（高瀬幸恵）、第三章「同志社高等女学部への統制とその対応についての考察」（柴沼真）、第四章「関東学院の建学理念の『揺らぎ』」（影山礼子）、第五章「興亜教育とキリスト教主義学校」（辻直人）、第六章「北京崇貞学園

樽松かほる他『戦時下のキリスト教主義学校』

への日本政府の財政援助」(樽松かほる)となっている。

こうした本書の構成からもわかるように、文教政策者による統制の実態、キリスト教主義学校における文教政策への対応の実態、戦時下におけるキリスト教主義学校の教育の実態、そして外国におけるキリスト教主義学校の実態と、まさに戦時下におけるキリスト教主義学校の実態を多角的にとらえていこうとしたものである。この点で、本研究成果は共同研究だからこそなせるものであり、きわめて貴重な研究成果となっている。

大島論文では、文部省が、訓令第十二号対象等、専修指定校、各種学校とさまざまな形態で存在していたキリスト教主義学校を、学校の設置者の財団法人化の促進や訓令第十二号対象校へと自主性を装わせて統制していく様を明らかにしている。高瀬論文では、立教高等女学校を事例に、キリスト教主義学校が文教政策への度重なる妥協の中で、キリスト教教育が「修養」の一部へと転換され、骨抜きにされることで、戦時下の教育体制に従属していったことを明らかにしている。柴沼論文では、同志社高等女学部が、文教政策との関係で、いかなる形で抵抗し、キリスト教主義教育を維持していったのかを論じている。また、影山論文では、財団法人関東学院を事例として取り上げ、文教政策との関係で、その寄附行為をたびたび変更し、ここでは建学の精神が揺らぎをみせながらも、なんとかキリスト教主義の文言を守り抜いていく過程を明らかにしている。辻論文では、戦時下における対アジア政策のなかで、興亜教育を取り上げ、キリスト教主義学校が学校を維持するために、率先してこれに沿った教育を実施していこうとする様子を明らかにしている。樽松論文では、崇貞学園が日本の文化融合という国策との関係において利用され、そこに多額の財政援助が積み込まれたことを明らかにしている。

いくつかのポイントに絞って、書評を試みたい。一つは戦時下のキリスト教主義学校の実態を文教政策のみならず、国の政策の中に大きくどのように位置づけていくのかという点である。とくに一九四〇(昭和十五)年には第

二次近衛内閣による新体制づくりがすすめられ、そのなかで高度国防国家を樹立するために、総力戦体制が作り上げられていく。つまり、文教政策も含めて、総力戦体制のなかに位置づけられていくことになる。

このように考えるならば、本書で明らかにされている事柄が、総力戦体制のなかでいかなる意味をもつことになったのかを明らかにしていくことが課題となっているのではないだろうか。本研究のテーマとして「多様性」に視点が置かれてはいるが、上記の視点を加えることで「多様性」の中に何か「共通」したものを見いだせないだろうか。

二つ目は、キリスト教界の動きとの関連性がやや不十分ではないかという点である。プロテスタントは外国のミッションと強いつながりをもっている。この点が戦時下で政府が警戒していた点でもあった。たしかに財団法人の理事や学校長等を日本人に変更していく動きについては述べられているが、これらの点も含めてキリスト教主義学校と深く関連をもつプロテスタント教会の動きとの関連性のなかにどう位置づけることができるのかが必要となってくるのではないだろうか。今回のキリスト教主義学校の設置者である財団法人の教育目的の変化の動きを位置づけていくこともふうようなのではないだろうか。

最後に、大島論文等でも課題として書かれているのだが、キリスト教主義学校という場合、プロテスタントのみならずカトリックも含まれる。そうすると、それほど数は多くないとはいえ、カトリック学校の動きはどのような者であったのかを説明していくことも今後重要な課題であろう。

(人間発達学科准教授)